

そろそろ、お嫁にいかがかな

### 【あらまし】

聞き手の一人である山田佳代(20歳)は、大学一年生の頃からボランティア活動をしている。そこで、森宗プリン(仮名、40歳)に出会う。山田には、永年、ボランティア先のスタッフをし、いろいろなことを経験している森宗は、とても多くのストーリーを持ち、きっと充実した毎日を送っているに違いないと思えた。さらに、働く女性の先輩として、これからの私たちにとって貴重で、素敵な話が聞けそうだと思い、インタビューに出かけた。

### ●小見出し

先生たちとの出会い  
世渡り上手な中学生  
みんなとは違うもの  
自分の行きたい道へ  
導かれるままに  
断れない性格  
ハード・スケジュール  
影番長  
保護者とのズレ  
十人十色

—子供の頃から今までを順を追って話して下さい。

小さい時は田舎に住んでいて、おうちには商売で。育ててくれたのは、母がちよつと番をしながら、近所のおばあちゃんとかが、育ててくれたんじゃないかと思う。初めて動物園に行ったのも、近所のおばちゃんに連れて行ってもらったし。苺のハウスを作ってるから、「苺できたぞ〜食べに来い」と言われて食べに行ったりとか。ほんとに、地域の人に育てられていたのかもしれないね。

でも、5歳の時に大水害にあつて、家が流れお店屋さんも廃業。そこから、今の実家に移動をして、1年生の区切りの時から新しいお家。

### 先生たちとの出会い

自分の中で転機は3年生。私、絵を描くのが苦手だったのね。幼稚園の時の絵を見ても、ひどい絵しかないのよ。その時の写生大会で、鐘つき堂を描いたら、空が余っちゃったのね。そこで空が寂しいから、柿の木をひろ〜んって先生が、ほんとはないのに柿の木を足してくれたの。「そういうものなの！ 絵って」とか思って。その絵がたまたまね、入選しちゃったの。世の中つてこう、あんまり、まじめじゃなくてもいいのかなとか。そんなことをたぶん考えたんじゃないかなと、今では思う。そこですごくおおらかになったのは3年生じゃないかなつて。

5年生の時に、「定年退職最後の年」とつていう先生に当た

つて。事件が起きたら、「誰がやったの？」みたいな。くだらないことなんだよ。給食お片付けをしてないのが一個残つて、「これは誰のですか」とつて。その犯人つて言われた子も、私と一緒に、掃除の始まるぎりぎりまで食べて、二人で片付けたのよ。その子は片付けたの。だから私が、「その子じゃない」とつて言ったら、「じゃあ、あなたが犯人？」つていう話になつて。「片付けた」とつて言ったら、「じゃあそこにあるはずないでしょ！ 一人が犯人でしょう」とつてなつて。それが一番初めての大ショック。なんで犯人なんだろうとか思った。

6年生の担任は国語の先生で、隣の先生は体育の先生だった。A組もB組もかき混ぜて授業をやつていて、朝の十分テストをやるんだけど、「誰々さん何点、誰々さん何点」とつて。まあ一問二十五点だけだね。グラフにされちゃうの。誰がどれだけできるかつていうのをはつきりされて。私のできる範囲をやつたら、クラスのトップ3に入れちゃったの。それがすごく自信になつて。

体育の時も、泳ぎは習つてない、みんな我流で泳いで何メートルつて世界なんだけど。6年生の時にはきちんとかろールで泳ぎなさいとか指定をされて、ほんのちよつと練習したら、テストを一番にパスしたりとかね。ほんとにこう、何かやりなさいつて言われて、「できた」とつて自分で達成感つていうか、自分の才能を引き出すチャンスをくれたのは、6年生の時の先生かなつて思う。

## 世渡り上手な中学生

中学校は、小学校が四つくらい、町と郊外から来て一緒になるから、今で言う、軽度発達の子や、社会的に弱者的な子も、いろんな子がいて、いじめがいっぱいあった。私の出席番号の後ろの子が、たぶん、あんまりおうちが裕福ではなくて、なおかつちよつと違う子だと思っただけ。服が汚れてたり、頭を何日も洗ってない、みたいな。周りから、「くさーい」とか、「気持ち悪い」とか、そんな風に扱われちゃうでしょう。

でもそれは、理由があるんだろうなとか思うから、それは言っちゃいかんよなとか思って、その子の悪口を言わなかったのよ。そしたら、「あの臭いやつの仲間だろう」みたいなになっちゃって。でも他のクラスには、友達に別にいるからね。逃げる道はいっぱいあった。3年生の時には、不良の人たちとも話はするし、そうじゃないいい人とも話はするし、っていうポジジョンに自分がいて(うまい)。

そうそうそう。近所にいた女の子がね、たぶんお父さんとお母さんが離婚をされて、不安定だから、その寂しさを求めるためにシンナー吸うとか、鑑別所送りとか、悪いことをしてたのね。その当時、その子が、「鑑別所はねくまずい飯なんだわ」とか、自分から話すことは、「ふんふん」っておもしろくて聞いてた。

その子が学校に来れなくなっちゃうといけないから、「鑑別所から出てきたよ」とか先生に聞いたたら、朝迎えに行つて、

「ちよつと学校行くよ」みたいな。学校に行つたら違うクラスだけど、とりあえず学校に連れて行つたり。

## みんなとは違うもの

一番最初は小学校かな、小学校に知的な遅れのある子がいて。やっぱりその子はいじめられて。でもその子がさ、知的な障害があるって分かんなかったから、その子んちに遊びに行くよ、えらいそこのおばちゃんが好きから、遊びに行つてやろうかみたい(大人)。でも別に、そのこと意識していなかったし、会話だつて成立しなかった。なんで遊びに行つてたかはよく分かんない。それが初めてだけど、別にそれは自分の中では大したことではなくて。

中学で陸上部に入っていて、3年生の時、国際障害者年つていうのがあつて。陸上部に障害者の陸上大会のサポートをやつて下さいつていうのがあつて。それで、たとえば「盲人の百メートル出る人集めて下さい」つて言われたら、テントが地区ごとに並んでるところを、「百メートル盲人レースです！ 盲人レースです！ はい、並んで下さい」とかつていう係を預かっている時に、ぱらぱらぱらつて雨が降つてきて。「みんな中に入れなさい」つて言われて。「みんな入つて下さい。テントで待機です」つて言つて回るじゃない。その時に、「何言ってるんだ。お前の方が待機しろよ。あなたが濡れるから中に入りなさい」とかつて言われて。

私たちが中学生なんだけど、障害者の人達に、「タオル、

タオル。これで拭け」とか、言葉のない人には、自分の帽子で、これかぶって濡れないように、とかして。そういう心のふれあいを通して、「この人たち、違うものを持つてるな」とっていうのが最初で。それがあってから、知的な遅れのある障害者施設に勤めたいなって思ったの。

### 自分の行きたい道へ

私が高校3年生になつて、3年間クラスが変わらなくて、担任の先生も私たちが初めての教え子だったから、「進路指導、失敗したくない」みたいな思いがあるから、「私立の理系に行く」とって言ったら、「女子は文系！ そんなことして仕事はない！」って言われて。私がやりたかったのは、「理学療法士」。作業療法やったりする人か、保母さんだったから、「じゃあ保母さんの方にしなさい」とって言われたから、選べなくて。

—え、その先生が選択しちゃうの。

そうそう、だって失敗したくないもん。「絶対全員を大学に入れる」とって言うのが、先生に課された課題だから。でも、憧れていた女の先輩が、日本福祉大学に行つて、「先輩行つたから、日福(につぶく)に行く」とって。ちよつと受けてみたら受かつちやつた。それで行くことに。すごいでしょ!?(すごいな)

単純に福祉か保育でだけで、なんにも考えてないから。大学は保育科に入つて、編入試験を受けて、社会福祉学部

に入った。親は、「女がそんなに勉強したって仕方がない。そんなんだったら早く手に職をつけて、安定した生活を」とっていう意向で。大反対されて、願書を出す一週間前までOKつて言わなくて、もう諦めて勉強もしてなかった。一週間前になつたら、「もう勝手にしなさい」とって言われて。急いで願書を出して、試験まで一週間、すごい勉強した。人生の中で一番勉強した。

たぶん受験生は三〇〇人くらいいるのかな、一〇何人しか受からなくて、本当に狭き門なんだよ。でもね、受かつたらラッキーじゃない。図書館で、朝九時二十分から、夜の九時二十分。その間に一時間休憩を挟んで、その間以外はずっと勉強してるの。また家に帰つて勉強。本当に七日間頑張つた。その時にもし受からなかつたら、就職活動もしてないでしょ。ポストの前でもし受かつてなかつたら就職はどうするんだろう、とか。すごい泣いてた。「合格」とっていうのを見て、学校に行つて、「やった〜」って言う時間を迎えたの。

### 導かれるままに

—大学ではどんな生活。

どんな生活、いい質問だね(笑い)。昼間はとりあえず学校に行くでしょ。Q(社会教育の団体)以外は休まずにちゃんと行つてたから。

—Qはいつ始めたんですか。

Qはね、1年生の五月。サークルに入ろうと思った時、運

動部と、障害児の勉強をしようってゆうのがベースにあつて、色々回ってる時、最後にもらった紙がQのリーダー募集の紙で、「子供と一緒に、障害児と一緒に運動しませんか？」って書いてあつて、見に行ったら、「はい、じゃあまた来週」って言われて。正直な私は、「行かない」とって思つて行っちゃったのが始まりかな。3年、4年は障害児のクラスをやつて、その前にある健常児の体操教室もやつたから、お昼終わつて、3限目の出席カードを書いたら、脱出。

それでもQが楽しかつたんだよね、きつと。短大の専門は、保育の専門で、社会福祉の専門と単位の置き換えできなくて、4年間分の単位を2年間で取らないといけないのね。でも、1年間での単位制限があつて、普通だったら取れないでしょ？ でも夜間の授業を取れば、なんとか頑張れるの。だから、夜間の授業も月曜日から土曜日まで、1限から7限までを全部取ることになつて。だから試験をそれだけ受けて、受ければいいみたいな。

—Qに行くの。

そうそう。週に2回行かないといけないから、きつかったよ。だからね、遊びに行くのは、Qでスキーに行くとかそんなんだけど、Qにお友達はいたけど、学校にお友達いなかったかも。

### 断れない性格

福祉の道を勉強し、「よし就職、何をやろうかな」って

思つた時、施設実習に行つて。「おばちゃんになつても、施設は勤めれるけど、保育園、幼稚園は若い時にしかできないから、若いうちに正常発達をみて、障害児をみたら、もつといいことができるかもしれないよ」って言われて。じゃあ、私たちがいい教育をして、それを認めてもらえる幼稚園に行こうと思つて。

でも、幼稚園を探し始めたから、自宅から何キロ以内とかそういう制限がいっぱいあつて。「あ、無理だ」って思った。それから企業も受けた。でも、なぜQを選んだかってゆうところだけど、幼稚園の体操教室を手伝つて、帰る時に、「お前決まったのか？ Qの試験があるから来い」って言われて。でも、そのQのいいところも分かつてるし、悪いところも分かつてるし、「どうしよう」と思つたけど、断れない性格だったから、行かないといけないかなあと思つて、試験を受けに行つたんだよね。それで終わつちやつた、就職活動。

### ハード・スケジュール

—Qに入ってからはどうだったの。

Qに入ってから、1年目はとにかくもう水泳。隔週週休二日制だったから、とりあえず5日間で二十四本入つた。もうプールに入ったら一日中入つた。朝、Qに来たら、ご飯食べずに夜、みたいな(えええええ)。

1年経つた時に、3歳児のクラスと障害児のクラスがやりたいって言つて、「うん、そうだな。ぜひお願いします」とかつ

て。面接で言われていたのに、開けたらプールしかないじゃね。その次の年もね、同じように、「3歳児のクラスと障害児のクラス」って言って、「他にはないか」って言われて。「んくあくじゃあ、高齢者のクラス」って言ったら、高齢者のクラスが入ってたの。そこでは大分鍛えられたね。

おばあちゃんたちは、こころ赤ちゃん返りじゃないけど、大人からまた子供っぽくなるってゆうでしょ。だけど、知識とか経験はあるから、ただの言うことを聞かない子供とは違って、ひと癖ふた癖ってゆうか。

今まで、おばあちゃん先生とおじいちゃん先生が、指導をしてたから、ビート版プッシュするとか、昔からやってる基本を、継続的にずっとやってて。でも、どうせやるならビート板をボールに変えて、楽しくやりたいと思ってやったのよ。そしたら、「こんなボールで、子供のお遊びじゃないんだよ。私たちは、ここにトレーニングに来てるんだよ」って怒られて、もう反発受けまくり。

まずはこの人に私を認めてもらわないといけないと思って、おばあちゃんたち、みんなプール終わったらサウナ行って、シャワー浴びて帰るのが恒例になってるから、おばあちゃんたちと一緒にサウナ行って、おばあちゃんの話聞く。とりあえず聞く。「どうやったたら天国にいけるか」とか昔の話を何回も、何回も同じ話を始めて聞くかのように、「そうなんだ」って聞いて。まずは認めてもらうっていうのが2年目3年目かなあ。一番鍛えられたと思うわ。

自分が競泳選手ってゆうわけじゃない、Qのリーダーになって水泳を始めた私が、大人のすっごい早い人とか、水泳部だった人とかの指導をするでしょ。理論では負けないってゆうかね、そこをどうやって自分の力でカバーするかってゆうのが、その頃の課題かな。

野外活動部門は、どんどん仕事が増えていって、全国のQの中で委託事業を頑張っていて、成功サンプルとして全国から見学に来てもらうような、そのくらいの時があったのよ。私に与えられたのは、国営公園の仕事だったのね。作業療法士さんが稼働率を増やすためにやる、トレーニングがあるでしょ。リクリエーションは普通のレクリエーションね。それを合わせて、その人が健康になるために、遊びの中にリハビリが入ってきて。楽しみながら自分が元気になっていこうよ、ってゆう公園にしたいってゆう意向で。

そのプログラムをどうするか、プログラム開発から、それをみんなに広めていくボランティア要請とかが業務だった。朝から夜中まで仕事して、次の日の朝仕事に入ってって、本当の徹夜だよ。忙しい時には、そんな仕事がずっと続いたりと。本当に死んじゃうなとか。

でも、その公園には、自分の余暇を利用して自転車や、テニスとかを楽しむ人たちの、番をしてるわけでしょ。人生なんか違うなとか、いいのかな私このままで、とか思って。このまま死んでっちゃうような気がする、と思ったからQを辞めて。

—その間は何をやったの。

間はね、十一月にQを辞めて、冬は、スキースクール。障害者でスキーをやりたい人の受け入れをしたり、キッズの受け入れをしたりして。サラエボ・オリンピックに出た人がその校長先生だから、子供たちがいっぱい合宿に来るのね。だから、その生活の面倒をみたりとか。でも、誰よりも早く、あいつには負けないよ、みたいな。トラブルが起きたり、いじめがあつたりとか、結局は、そんなサポートになっちゃった。

春になった時に、「続けて手伝って下さい」って言われた。スキースクールなんて、社会に出たことのないフリーターみたいな人と一緒に働くでしょ。そこには、今選手になりたくて頑張っている人たち、現役の選手ばかりが、インストラクターだから、ある意味真剣だし、ある意味社会の流れを知らない人たちで。

たとえば、ダイレクトメールを出すのに、AレッスンとBレッスンに来ていれば、履歴が2つで出てきて。同じ手紙が2通送られてくるんだったら、チェックして1個にしようよ、って言ったたら、「いいじゃん、社長がこれ送れって言ったんだし」。「え、信じられない、そんなこと言う人」って、みんながそういう風だから。また、その社長も自分がレッスンに出たいんだよね、自分が元気なうちにレッスンしてって。そういう世界だったから一緒に仕事できないあつて。自分は社会を見てきているでしょ。

## 影番長

春営業が終わった時に、J Rのスキー場の方に入って営業課で仕事をしたの。その営業課ってゆうのは、売店とレストランのお店を實際に開けて、館内の営業活動を知ってもらふことってのが範囲。毎日正社員ではなく非常勤ってゆう立場で入るから、自由なんだよね。

その営業課の課長さんは、J Rのスキー場なんだけど。村の職員も1人、2人そのスキー場の中にいれて、村もサポートしていますよっていう風な運営の仕方をしてたから。今まで牛を育ててた人が、営業課の課長になっちゃったのよ。正社員の人たちは、人を使ったことのない人たちが管理をしようとするからさ、「待って待って、これ無駄だよ」とかって思っちゃうじゃない。でも課題は、J Rの本隊から落とされるでしょ。資料ができなかったりしたら、「こういう風に考えたらどうかかな」って。プログラムを作って、「はあ、じゃあ会議に持っていくます」みたいな。影で仕切る。それがまた面白いんだけど(笑い)。

私だって、そんな山を好きじゃないけど、ここに来てほしいとか思ってる。「ここにはこんな素敵な自然があるよ」ってアピールをしようって。仲間と言ったら、「うん、いいね」って言うて。

でもみんな体を動かすのが好きじゃない子たちだから、私が十日に1回、山頂まで行って全部花の写真を撮って。「このエリアは花が見ごろだから、ぜひ行って下さい」とかって

ゆうのを、もう壁全部使って。Qでやっているようなことをそのままやったら、JR本社から「すばらしい」とか言われて。

だから、Qで普通にやっていたことが、他の会社で生かされることもあるし。普通の会社ですごく普通にやっていたことが、Qでも生かされることってあるから。何をやってもプラスなんだと思う。だから、ああ、違う世界が見れて面白かったな。時間は自由だし。

### 保護者とのズレ

—Qは戻りたいと思って、戻ったの？

軽度発達のクラスを立ち上げて、お試しプログラムを半年間、そこからスタートして、半年間。ちょうど丸1年立ち上げのところに携わって、「ここに私が抜けた時に、この人が替わりにやって、そのためにこの人付けて」とか段取りをして辞めた。

でも、やっぱりうまくいかなかったんだよね。知的障害と軽度発達の違いが分からなかったんだよ。指導者が、「○○ちゃあん、□□しますよお」とか、小学生に対して、幼稚園の口調だったり、テンポだったりして、話しかける。

そしたら、「分かっているの？ 私たちの子供たちのことー」みたいな。心は、その学年相当でも、コミュニケーションが足りなかったりとか、本当の学習が足りなかったりとか。本当に、ワンポイント足りないところがある子達だから、十人十

色じゃない、あの子達は。だけど、それを十分分かってあげられなくて、足りないところがポロポロ。

それに対していろいろなわだかまりが、保護者とQと重なって、「訴える」、「裁判かける」ってゆう話になって。だから、お母さんたちがお金を出し合って、「あなた一人くらいだったら雇える」って言われて。私がNPOを立ち上げて、その子達のクラスをやれって言われて。でも、私が一人で頑張ってたって、私が一生この子たちの面倒を看れるのかって言ったら、お嫁にいくかもしれないしさ(笑い)。面倒看れないかもしれないでしょ。

じゃあ、次を育ててって言ったなら、どこからリクルートしてくるのとか、私自身に責任がとれないと思ったんだね。それなら、Qに戻って、Qで人と場所を借りてプログラムをやった方が、私がお嫁に行く時には、次の人を育てればいいわけだから支障はないでしょ。保護者も、私が帰ってきたら、とりあえずQは続けると。だから訴えるのも取り下げると言ったから、「じゃあ、Q帰る」って言って。

Qからも、「とにかく帰ってこい」って言われて。「どうしよう、そしたらもう二度とQ辞めれないし」とか、いろいろ考えた。でもやっぱり、その子たちに責任を感じてるところもあつたんだよね。その1年やって辞めちやっただってゆう責任から、ちよつと、良心働いちやっただかなあ、戻ってきちやっただ。

—戻ってきちやっただの。  
私がやってないことをさ、無条件に「ごめんなさい、ごめ



んなさい」って言って、許してもらわないといけなかったり。「はあそうなんですか。Qはいけませんね」みたいな。そうやって聞いたら、嬉しいってゆうか、とにかく「ごめんなさいシリーズ」が1年間続いて。

さらに、「Qは、言えばやってもらえる」みたいになっちゃうでしょ。文句言えば、私たちの方が勝てるみたいな。その障害を持っている親が決して悪いわけじゃない。やっぱりいつも虐げられたり、つらい思いをあの人たちはしているじゃない。だから、ちよつとでもよく面倒見てほしいとか、思いとして、すぐQに入れ込んでいるってゆうかね、そんなところがあるから。余計にお願いが大きくなっていくんだと思うの。それをどういう風に受け止めて、どこまで聞いて、どこまでできませんって言うのとか、その辺が難しいなって思った。

## 十人十色

障害児の、その知的な子供たちに対する体操教室をやってきた時は、子供たちの成長がみんな同じようにゆっくりで、ある時急にグイーンって伸びたりしないから、お互いが許せるんだよね。「〇〇ちゃん、上手になったね、一人で回転できるのね」とか、それぞれお母さん同士が仲良く子供を認めて見守ってくれた。

でも軽度発達の子達は、「この子はお勉強ができる」、「この子はコミュニケーションがダメ」とか凸凹が激しいでしょ。だ

から学校で、「〇〇ちゃんは暴力ばかりふるって本当にダメよね。あの子のそばにいると怪我しちゃうから、あの子と一緒にしないで」とか傷つけられている。

だからお母さんとしては、子ども達それぞれに得意、不得意があつて、みんなが、少しでも他の人によく見てほしいという思いが大きいから、お互いが喜ばないんだよね。お互いの子供のいいところを認められないんじゃないかな。

私が一番最初に失敗したのは、「〇〇ちゃんすぐく上手になつてよかつたね、跳び箱五段跳べたね」って。ある子を見んなの前で褒めちやったりすると、もうノー。今までは、「〇〇ちゃん、これできた」って、その都度みんなで言うって、みんなでシェアし合えたけど、この場合はそうじゃなかったのよ。

どこかで私を批判しておいて、みんながひいていくと、「私だけだよ、あなたに付いてるの」みたいな理論。すごい人間の怖いところを見ちやつたね。そんな風に追及されて、人生の中で一番どん底。どんな時よりも、どん底だった。こ

う中傷ばかりされて、人が信じられないってゆうかね。今までは、この人はよしと思つて話してたことを、全部逆手にとられちやったり。なんでもかんでも、「訴えるよ」みたいな。でもそれは、本来おかしな話じゃない。おかしな話だけど、「ここではダメなんだ」ってゆうのを、その時初めて知つた。

でも、それくらい私たちが頑張らなくっちゃいけない、い

いかげんにしちゃいけない、期待されてるんだろなって思う。理想としては、一人の成長とか、変化をみんなが認め合えるような環境や仲間を作りたい。

—プリン、お嫁にいろいろと思ったことはないの。

お嫁に行こうと思ったこと、ないわけじゃないけど、相手がいなかったかなあ。でも一番最初は、大学のゼミの研究で、男の子3人と私の4人で車椅子マラソンの研究をしたの。その中の1人が、車椅子で生活をしている子で。その頃小学校に、「車椅子では生活できないから、養護学校に行つて下さい」って言われて受け入れてもらえなかったの。別に知的な遅れじゃないからさ、車椅子だからって、少々不自由してもいいですって言つても、「いいえ、怪我をしたら困ります」みたいな。

その子は、中学校、高校も全部養護学校で、養護学校しか行けなかったのよ。「僕は地元でね、障害者が普通の学校に行きたいって希望を出したらね、いいよって言つてあげられる公務員になりたい」って。「だから福祉職について、福祉問題に取り組みたい」っていうのが彼の希望だったのね。でも、私が早々にQを決めちゃつて、ほんとに仕事が忙しかったし、遠距離恋愛は無理だった。携帯がなかった時代だからね。忙しくて、おうちの電話にも出やしないみたいなの。だから、すれ違いで「さよなら」しちゃったね。まあ結婚をして子供もいるんだけど。「あん時お前、俺と結婚しとけば良かったのに」とかそんなネタになる。

—いまだに連絡をとってるんだ。

うん。子供がね、生まれる時に自分は車椅子じゃない。どんな子が生まれるか心配だったり。奥さんが、七つくらい年上なのかな。高齢出産だったからさ、一か月前から入院し出産されたから。家に一人になるでしょ。そしたら、「はあ、なんで男は無力なんだろ。俺はなんにもしてやれない。父さんはほんまになんの力もない」って、そうやって電話をかけてきて。不安でどうしようもないとか、そんな話もできる。だから、わだかまりはないけど。

でも、出会いはないよ、ここにいます。

—じゃあ、プリン、このままずっとQにい続けるの。

いやいや、嫌。「お嫁にいろいろかな」って思つてて(笑い)。